

プロローグ

「人形劇とシェイクスピア」と言えば、イルジー・トルンカ(Jiří Trnka, 1912-1969)が思い付く。トルンカは、チェコのアニメーション監督、人形作家、絵本作家として知られているが、その中でも人形アニメーション映画『真夏の夜の夢』(1959)は賛否両論あるが、注目を浴びたことも確かである。この場合には「人形劇とシェイクスピア」と「映画とシェイクスピア」というふたつの側面を持っている。これまでもシェイクスピア映画研究は行われていること⁽¹⁾、筆者は「人形劇によるシェイクスピア劇上演記録」(2018)をまとめており⁽²⁾、本稿では「人形劇とシェイクスピア」をテーマとして、地域を日本に限定して考察していきたい。

1 人形劇とは

「人形劇」について一般的な解説としてインターネット上に公開されている川尻泰司・藤原玄洋「人形劇」(『日本大百科全書』(ニッポニカ)の解説)を見ると以下の通りである。

人形劇は、造形物体である人形を俳優（人形遣い）が操作し演技表現を行うのが特質で、人間劇、仮面劇とともに、演劇のもっとも基本的な形態における三分野の一つを構成する。

その発生は、万物が靈魂を有すると考えるアニミズム的思考やシャーマニズム的呪術(じゅじゅつ)をもとに、生産的諸行事や祭りのなかでさまざまな人形が舞わされてきたというところに求め

られよう。それらがやがて人形による演劇として形成されていった。人形劇は、人間劇に比べ「ことば」より「動き」による表現の比重が強く、美術的效果が大きな役割をもち、幻想性に富み、ときに怪奇的でさえあるが、幼児の心理にも容易にしかも強く働きかける特質がある。⁽³⁾

シェイクスピア劇が台詞を中心にするのであれば、『ことば』より『動き』による表現の比重が強く」の部分は「人形劇とシェイクスピア」を考える際に重要なポイントとなろう。さらに「美術的效果」は演出としては重要である。エリザベス朝時代の上演は、「なにもない空間」で行われるため、台詞と役者の衣装は大きな役割を果たした。舞台装置が大掛かりになるのは後年のことである。

次に人形劇の種類を考えると手遣い人形(パペット)、棒遣い人形、糸操り人形(マリオネット)に大きく分類することができるだろう。この他にも人と同じ大きさの着ぐるみの人形もある。

最後に注目したい点は人形劇が台詞劇の形式をとるかどうかのも重要な点である。

2 日本の人形劇小史

日本の人形劇史はおおよそ 12 世紀初期の大江匡房『傀儡子記』(1087)に記されている大陸から渡来した棒状の杖頭傀儡に始まると言われている。大江匡房(1041-1111)は姉妹編である『遊女記』も同時期に発表している。傀儡は操り人形を意味しており、中国では人形(木人)を表し、歌を歌う者を指していた。日本では狩猟しながら、党と呼ばれる集団で漂泊し、剣術、人形つかい、奇術を業とする者たちのことを指している、もともとの中国の傀儡の考え方は

人形浄瑠璃に共通する点がある点は見逃せないところである。人形劇の原点が曲を伴っていることは、台詞劇の系統ではないことを意味する。

（１）江戸時代の人形芝居

日本の演劇形態は音楽、すなわち曲が伴う。人形劇の原点もまた同様であった。このため、日本の演劇は戯曲と呼ばれる。浄瑠璃は三味線音楽における語り物の総称であり、室町時代に成立して、江戸時代に最盛期を迎えた。安土桃山時代末期（1590 頃）に、西宮の傀儡師（人形遣い）が語り物である浄瑠璃と融合して誕生したのがいわゆる人形浄瑠璃と言われている。中でも人形浄瑠璃専門の劇場、文楽座ができたことから、明治以降は文楽の名で親しまれている。シェイクスピアと文楽についてはすでに拙著「シェイクスピア文楽」（2018）で論じているため、ここでは取り扱わないものとする。ここでは現存する糸操り人形一座、結城座を取り上げておきたい。

（２）結城座

結城座は現在は公益財団法人江戸糸あやつり人形結城座として公演を続けている。その歴史と歩みを少し長くなるが、ホームページより紹介したい。

結城座は江戸時代の寛永 12 年（1635 年）に初代結城孫三郎が旗揚げいたしました。

それから約 370 年の長い年月を経て、現在 『国記録選択無形民俗文化財』『東京都の無形文化財』に指定されている、日本唯一の伝統的な江戸糸操り人形の劇団です。

江戸幕府公認の五座の中では、歌舞伎三座（市村座、中村座、河原崎座）は座元名のみの継承となり、残る薩摩座も姿を消してしまい、現在<座>として存続するのは結城座のみとなりました。

現在の結城孫三郎は、平成5年5月に三代目両川船遊が十二代目結城孫三郎を襲名いたしました。

結城座の主な活動としては、歴史ある「古典公演」の他に、書き下ろしや翻訳による「新作公演」があり、新作の中では、役者と人形が同じ劇空間で競演したり、人形遣いが人形を使う一方で生身で役を演じたり、また劇中に「古典」の手法や、これも江戸時代から伝わる「写し絵」（ガラスの板に絵を描き投射する）等を入力するなど、常に結城座独特の舞台空間を創造し続けています。

マクベス夫人を操る結城雪斎

また、数度にわたるヨーロッパ、中近東、東南アジア、旧ソ連、アメリカなどの海外公演も成功を収め、1986年ベオグラード国際演劇祭においては、「マクベス」で今までの人形劇のジャンルを越えた演劇として『特別賞・自治体賞』を受賞し、国外でも高い評価を得ました。

これら結城座、および故・結城雪斎の活動は『芸術祭文部大臣賞、東京都知事賞、紫綬褒章、勲四等瑞宝賞、文化財功労者賞』等を受賞しています。⁽⁴⁾

結城座がシェイクスピア劇上演に取り組むのは戦後のことである。結城座のおもなシェイクスピア劇上演は以下の通りである。

『人形芝居マクベス』、結城座、小田島雄志訳、佐藤信演出、マクベス＝結城孫三郎、マクベス夫人＝中村邦隆（結城雪斎）、結城座、1982年4月10日～11日、16日～18日、23日～25日

『人形芝居マクベス』、結城座、小田島雄志訳、佐藤信演出、結城座、1984年1月7日～8日

『人形芝居マクベス』、結城座、小田島雄志訳、佐藤信演出、マクベス＝結城孫三郎、マクベス夫人＝富田直美（結城雪斎）、武蔵野芸能劇場、1985年4月13日～29日

『ある人形芝居の一座によるハムレット』、結城座、福田善之構成・演出、武蔵野芸能劇場、1986年1月12日～26日

『人形芝居マクベス』、結城座、小田島雄志訳、佐藤信演出、武蔵野芸能劇場、1987年4月11日～26日

『ハルとフォルスタッフ』、結城座、福田善之構成・演出、フォルスタッフ＝金田龍之介（客演）、武蔵野芸能劇場、1989年1月14日～29日

『オセロ』、結城座、木下順二訳、福田善之演出、シアター・サンモール、1992年1月15日～21日

『リチャード三世』、結城座、小田島雄志訳、福田善之演出、リチャード三世＝結城孫三郎、アン＝稲垣愛、パナソニック・グローブ座、1993年5月19日～23日

『テンペスト』、結城座、小田島雄志訳、福田善之演出、プロスペロー＝結城雪斎、石橋蓮司、本多劇場、1994年2月17日～20日

『夏の夜の夢』、結城座、小田島雄志訳、加藤直構成・演出、斎藤晴彦（客演）、宮本裕子（客演）、イワト劇場、2012年3月8日～3月14日

3 明治以降の人形芝居について

明治時代の人形芝居を考える時、大坂（現在は「大阪」と表記す

る)で17・18世紀に全盛を迎えていた人形浄瑠璃のことを蒸しては考えることはできないだろう。人形浄瑠璃も、一人が一体を操っていたが、やがて三人遣いが主流となり、これにより経営としては演技者の増加により負担が大きくなるに加えて、天保の改革(1841-1843)により人形浄瑠璃だけではなく、広く興行自体が行えなくなり、大坂から日本各地へ興行が分散化していくこととなった。

1872年に植村文楽軒が大阪に文楽座を開場したことに再び、芝居が盛んとなった。加藤暁子『日本の人形劇 1867-2007』(2007)では次のように述べている。

今日、「文楽」の名称でわたしたちが楽しんでいるものは、明治のはじめに義太夫語り

植村文楽軒が、大阪に人形の座を復活したことがはじまりとなっている。

一時期、衰退していた人形浄瑠璃は文楽座によって復活し、明治中期に黄金時代を迎えた。これには、義太夫、三味線、人形遣いのいわゆる三業に、すぐれた人材があらわれたことが大きい。新時代になって新しい観客が誕生し、いい意味での緊張感が作り手のなかに生まれたことによるのだろう。⁽⁵⁾

明治期には新工夫、新形式による西畑デコ芝居(高知県西畑村より)、秋田や山形の猿倉人形芝居などが誕生するが、必ずしも古来伝承型のものではなく、新しい時代の到来の中で誕生した芸能である。新しい人形芝居は立ち姿がよく、なおかつ手がよく動く棒遣い(差し金遣い)の操作法が考案された。一人遣いは動き易く、テンポとリズムが生まれた。

(1) ダーク一座

西洋人形芝居としては 1894 年 5 月～7 月に興行したダーク一座が注目をあびた。このダーク一座の人形芝居は糸操り人形である。加藤暁子『日本の人形劇 1867-2007』(2007)によれば、人形浄瑠璃とダーク一座の違いは次の通りである。

前者は、人形遣いが観客から見える出遣いであって、語り手と人形操作者は分かれているが、後者は、操作する人が見えないで人形だけが登場するセリフ劇であった。⁽⁶⁾

ダーク座は初演の成功の後、1897 年にも来日し、日本各地で 3 年間巡業公演を果たした。最終的には東京の浅草の遊園地「花屋敷」に常設小屋を持つまでになった。なお、ダーク一座の興行等については「見世物興行年表」⁽⁷⁾の「ダーク一座」に掲載されている。

その後座主のジョージ・ダークは日本での興行主であった松根末吉に人形をはじめ、道具等を譲った。⁽⁸⁾シェイクスピアが演目選ばれたことはなかった。西洋の人形劇の登場によりバリエーションが誕生したことになるが、文楽が曲に合わせた語りであり、西洋の人形劇が台詞劇である点は見逃せない点である。ダーク座がシェイクスピア作品を扱った記録は見当たらない。

(2) 木馬座

木馬座は 1946 年に影絵作家の藤城清治 (b.1924) が中心となり「人形劇場ジュヌ・パントル」として結成された。もともとは影絵劇団としてスタートした。1952 年に「木馬座」に改称し、2003 年

には非営利活動(NPO)法人木馬座が創設された。木馬座は日本の幼児・児童向けのぬいぐるみ（着ぐるみ）人形劇団である。現在の木馬座のHPには次のように掲載されている。

商業ベースでは困難な訪問公演の実現を目指し劇団木馬座は、特定非営利活動法の制定に伴い、商業ベースでは成立しない訪問幼児演劇の振興のため、平成 15 年に NPO 法人木馬座を独立させました。それまでは園回り公演としてサービスで実施していましたが、それでは訪問する劇団も、それを招く幼稚園・保育園も、互いに金銭的負担が多く、必要なことは分かっているにもかかわらず、訪問公演を実施することが現実には困難でした。そこで、その問題の解決のために創設されたのが NPO 法人木馬座です。⁽⁹⁾

木馬座も様々な変遷を経ているが、「藤城清治プロフィール」によれば、1961 年が一つの起点にもなっている。

等身大ぬいぐるみ人形劇を創設、ぬいぐるみ劇を中心とした木馬座の上演活動に重点を置く⁽¹⁰⁾

藤城清治、着ぐるみ人形と言えは着ぐるみ人形の「ケロヨン」があまりにも有名である。1966 年に木馬座が自社提供した TV 番組「木馬座アワー」（日本テレビ系 21 局ネット、月～土）がスタートし、そこで爆発的な人気となったのがケロヨンである。ゆるキャラと言えるかどうかはわからないが、ケロヨンは当時の TV 放送と合いまって大人気を博した。

木馬座によるシェイクスピア劇上演は現在までの調査では見当たらない

(3) プーク座

プーク座は 1929 年に山中重治、高山貞章、潮田租、吉田隆子ら 18 名で東京赤坂の三会堂で「リップ・ヴァン・ウィンクル」と「クリスマス綺譚」を上演したことに始まる。その時は LA PUPA KLUBO を名乗っていた。この名前の由来については人形劇団プーク座のHPより紹介したい。

人形劇団プークは 1929 年（昭和 4 年）に創立されました。創立のときの劇団の名は「人形クラブ」です。

人形クラブを創立した時代、1920 年代はヨーロッパ全土を巻き込んだ第 1 次世界大戦がようやく終わり、二度と戦争を起こすまいとの願いから、様々な平和のための運動がおきました。ロマン・ローランやジョリオ・キュリーらの「平和の擁護」運動や中部ヨーロッパを中心とする青年たちの「ワンダーフォーゲル」運動などがありますが、その中のひとつに、「言語の違いが意志の疎通の障害になり、それが戦争につながる」と考えたザメンホフが、創案した国際共通語エスペラント（希望の人の意）運動があります。プークを創立した青年たちは、このエスペラント運動にも関心をもっていたことから、自分たちが創った「人形クラブ」の名を、国際的にはエスペラント語で

LA PUPA KLUBO

正式名称とし、仲間内では、人形を意味する PUPA の "PU" と、クラブを意味する KLUBO の "K" をとって PUK（プーク）と略称でよんでいました。それがいつしか人形クラブの通称となり定着していきました。戦後、1946 年 11 月、劇団を再建にあたり、

劇団名を正式に「人形劇団ブーク」としました。⁽¹¹⁾

ブーク座によるシェイクスピア劇上演は現在までの調査では見当たらない

(4) ひとみ座

ひとみ座の概要と沿革をひとみ座のHPより紹介しておきたい。

太平洋戦争が終わってまもない 1948 年、鎌倉アカデミアに集まった若者が中心になって演劇活動を始めた。その活動には俳優による舞台劇だけでなく人形劇もとり入れていた。やがて人形劇の専門劇団、「人形劇団ひとみ座」を発足、幅広い活動を展開し、今日にいたる。

舞台作品の多くは、東京都児童演劇コンクール優秀賞、NHK 賞などを受賞。子どもを対象にした作品に加えて、「リア王」（俳優座劇場、新国立劇場）などのシェイクスピア作品、安部公房や泉鏡花の戯曲、大人を対象にした人形劇も数多く創り、一方「乙女文楽」などの伝統人形の研究と継承も活動の柱としている。

また、映像・テレビ時代の到来と共に「ひょっこりひょうたん島」「ネコジャラ市の 11 人」「伊賀の影丸」「笛吹童子」「紅孔雀」といった作品を送り出した。共同映画社との共同制作・映画「おおあなむちの冒険」などの大作もある。活動範囲は、日本全域にわたるが、近年ではアメリカ、カナダ、中国ほか海外にも広がる。また、20 年続いた「かわさき市民プラザ人形劇まつり」をはじめ、地元川崎を中心とした地域との結びついた活動も大切にしている。⁽¹²⁾

人形劇団ひとみ座の名前を一般に広めたのは1960年9月5日から1967年3月28日までNHK総合テレビで放送された飯沢匡脚本／三輝容子演出による着ぐるみによる人形劇『ブーフーウー』と1964年4月6日より1969年4月4日までNHK総合テレビで放送開始となった井上ひさし・山元護久脚本／須田輪太郎演出（人形指導）の人形芝居『ひょっこりひょうたん島』である。ひとみ座の名前だけではなく、人形芝居そのものの認知度が高まったことは言うまでもないことだ。

ひとみ座によるおもなシェイクスピア劇上演は以下の通りである。

『人形芝居マクベス』、ひとみ座、倉橋健訳、清水浩二演出、東横ホール／第一生命ホール、1961年5月16日～19日、24日～26日／8月下旬（8月下旬についてはひとみ座のHPでも未掲載）

『千日島のハムレット』、ひとみ座・発見の会、今野勉・佐々木守作、瓜生良介・宇野小四郎演出、ハムレット＝斉藤晴彦、フォエリア＝三輪勝恵、千日谷公会堂、1967年12月10日～12日、17日～18日

『人形劇ハムレット』、ひとみ座、山本清彦脚本・演出、1970年（月日についてはひとみ座のHPで未掲載）

『テンペスト』、ひとみ座、山本清彦脚本・演出、1971年（月日についてはひとみ座のHPでも未掲載）

『ロミオとジュリエット』、ひとみ座、勝元勝人演出、1971年（月日についてはひとみ座のHPでも未掲載）

『リア王』、ひとみ座、斎藤勇訳、伊東史郎台本・演出、リア王＝須田輪太郎、コーディリア＝伴道子、俳優座劇場、1988年6月～7月（上演日についてはひとみ座のHPでも未掲載）

『リア王』、ひとみ座、伊東史朗演出、俳優座劇場、1989年5月23日～25日

『マクベス』、ひとみ座、松岡和子訳、友松正人台本、藤川和人演出、俳優座劇場、2009年3月24日～27日

『ロミオとジュリエット』、ひとみ座、藤川和人脚本・演出、人形劇団ひとみ座第一スタジオ、2011年3月5日～8日

『テンペスト』、ひとみ座、藤川和人脚本・演出、全労済ホール（新宿）、2012年3月23日～3月27日

『リア王』、ひとみ座、斎藤勇訳、伊東史朗脚本・演出、県民芸術みらいホール（横浜）、2016年3月24日～3月27日

『リア王』、ひとみ座、斎藤勇訳、伊東史朗脚本・演出、調布市グリーンホール大ホール、2017年2月4日

HPでも紹介されている通り、ひとみ座は「人形劇＝こどものための劇」とせず、さらにシェイクスピア劇も継続的に上演されていることは注目すべき点である。

（５）その他の人形劇団

戦後に入ってから児童文化の推進等、子どもを意識した人形劇団が結成されている。1966年にはぬいぐるみ人形劇団・劇団飛行船（川崎）、1969年に着ぐるみの人形劇団・劇団こぐま座（東京）、1982年には人形劇トムテ（大阪）などが結成されている。上演演目は児童向けになっているため、児童文学作品が中心となっており、シ

ェイクスピアの作品は取り上げられていないようだ。

1948年創立のクラルテ（大阪）は、2001年10月4日～6日にテイジンホール（大阪）で人形劇『ハムレット』（東口次登脚色・演出）、その後、2017年9月29日～10月1日にもアイホール（兵庫）、10月13日～15日にも近鉄アート館（大阪）でも上演された。2001年の公演については『朝日新聞』（2001年9月28日夕刊）での植田耕司が記事を寄せているが、インターネット上でも紹介されているので、その一部を取り上げておきたい。

主人公の心理 3体で描写

「おかげでおれは気が狂った。もうだれも結婚などするな。独り身でいろ。尼寺へ行ってしまえ」

大阪住之江区にある劇団のアトリエで、けいこはハイライトの「尼寺」の場面にさしかかっていた。彫りの深い木製の首にすらりとした長い首筋が特徴的。ハムレットは喪服をイメージした黒いチョッキ姿、オフィーリアはせいそな淡黄色の衣装。ともに、演者がせりふを語りながら操作する一人遣いの形式だ。脚色・演出の東口次登は「せりふなど障害は多いが、過去と現在を入れ替え、想像に訴える点では人形劇が優れている。大人の鑑賞に堪える舞台にしあげたい」と話す。

指人形も登場

クラルテは48年創立のしにせ劇団。近松作品にこだわり、昨年は「こもち山姥」を上演。今年は一転、西洋ものに取り組むことになり、シェークスピアの代表的な悲劇を選んだ。東口が英語の原本を基に翻訳本を参考にして一気に台本を書いた。

出演者は全部で15人。ハムレットなど主な登場人物10人は一

人遣いの人形で、旅回り一座や墓堀などは劇団員が仮面をかぶって演じるやり方だ。ハムレットのほかに内面を表すハムレット A、同 B を創作し、3 体一緒に登場させて心理面を深める。また、旅回り一座も人形芝居一座とし、クラルテの作品「狼と 7 匹の子ヤギ」を演じるほか、劇中劇「ゴンザーゴ殺し」は指人形劇とするなど随所で趣向をこらした。

ところで、人形劇団の強みは、首から衣装、小道具、舞台装置に至まで全部、自前で作れることだ。公演や稽古の合間に、全員が手分けして準備を進めている。⁽¹³⁾

クラルテの人形は比較的大きなものを使用していること、台詞劇としての人形劇となっていること、人形劇でないとできない演出によりハムレットの内容を表現しようと言う点など、人形劇の強みを生かした上演になっている。

一方、台詞に拘らず、2016 年 2 月 27 日に東京文化会館で上演されたチェロの音色に合わせたたいじょう脚本・演出、宮田大（チェロ）の『Hamlet』などの試みもあった。バレエもそうであるが、台詞はないが、音楽表現・身体表現としての芸術性という観点からシェイクスピア作品の新しい表現方法が模索されていることも大きな流れである。

（6）人形芝居と TV の登場

1953 年にテレビ放送が開始されたが、当時はまだテレビ局がすべて番組を製作するだけの力がなかった時代である。このため、早くから人形劇がテレビ放送で活用されていた。プロレスやボクシングなどの放映はもちろんあったが、NHK 総合テレビも 1958 年 4 月か

ら連続ドラマ『事件記者』をようやく放映するなど、まずテレビ放送がはじまり、ソフト面はあとから追加されていった時代である。1963年1月には民放ではじめての連続TVアニメ『鉄腕アトム』が放映されたが、NHKはそのテレビ局の性格上、アニメの放映は難しかったかもしれない。現在ではそうではないが、これも時代の流れというものだろう。前述の通りひとみ座は早くからNHKでの人形劇放映を行っていたが、1963年4月7日から1965年4月1日までNHK総合テレビで放送された手塚治原作の人形劇『銀河少年隊』は竹田人形座が担当した。この1964年どのような年であろうか。拙著「TV放送のオタク文化への影響」（2015）で次のような分析を行っているので紹介しておきたい。⁽¹⁴⁾

TV放送が開始されたからといって全家庭にテレビがあったわけではない。「NHK受信契約数の推移」によれば、1953年の地上波テレビ受信契約数は1,485件である。当時はまだラジオ受信料の時代であり、同年のラジオ受信契約数は10,539,593件である。1953年から1964年までの契約数は以下の通りである。

年	ラジオ契約数	テレビ契約数	備考
1953	10,539,593	1,486	TV放送開始
1954	11,709,173	6,779	
1955	12,505,370	52,882	
1956	13,253,608	165,666	
1957	13,907,137	419,364	
1958	14,590,807	908,710	東京オリンピック開催地に決定
1959	14,605,745	1,982,379	明仁皇太子ご成婚
1960	13,413,077	4,148,683	

1961	11,802,387	6,860,472	
1962	9,451,790	10,222,116	
1963	5,104,081	13,378,973	日米初衛星放送
1964	3,702,356	15,662,921	東京オリンピック

メディアの中心がラジオからテレビに代わっていく様子が契約数からも伺える。現天皇陛下の皇太子時代のご成婚の年には100万件以上の契約があり、テレビの普及を加速化させたと言われている。ラジオでご成婚の様子を聴くよりは映像としてみたいと言う気持ちはかなり強かったのである。その後は東京オリンピックまで契約数は増加し、1962年にはラジオの契約数を抜き、メディアとしてテレビが重視されていくことになった。

1962年当時は1964年の東京オリンピックに向けて上昇傾向にある時期である。同時期の人形劇や連続テレビアニメのTV放送の番組を見ておきたい。

1953年 テレビ放送開始

1953年 人形劇『玉藻前』 NHK 総合放映開始

1956年 人形劇『チロリン村とくるみの木』 NHK 総合放映開始

1960年 人形劇『宇宙船シリカ』 NHK 総合放映開始

1960年 カラーテレビ放送開始

1960年 着ぐるみ人形劇『ブーフーウー』 NHK 総合放映開始

1963年 人形劇『銀河少年隊』 NHK 総合放映開始

1963年 TVアニメ『鉄腕アトム』 フジテレビ系列放映開始

1963年 TVアニメ『仙人部落』 フジテレビ放映開始

- 1963 年 TV アニメ『鉄人 28 号』フジテレビ系列放映開始
- 1963 年 TV アニメ『エイトマン』TBS 系列放映開始
- 1963 年 TV アニメ『狼少年ケン』放映開始
- 1964 年 TV アニメ『0 戦はやと』放映開始
- 1964 年 TV アニメ『少年忍者風のフジ丸』放映開始
- 1964 年 TV アニメ『ビッグ X』放映開始
- 1964 年 人形芝居『ひょっこりひょうたん島』NHK 総合放映開始
- 1964 年 東京オリンピック開催

外国の人形芝居『サンダーバード』は 1966 年 4 月 10 日から 1967 年 4 月 2 日まで NHK 総合テレビで放映されたことも付け加えておきたい。

人形芝居はいわゆる大まかにいえば、指人形、人よりも小さな操り人形と人間が入って演じる着ぐるみに分かれることになる。人形芝居を含め演劇一般、映画、さらにラジオは TV 放映が開始された 1953 年、TV アニメが民放で放送された 1963 年以降はテレビ番組の充実とともに大きな影響を受けることとなる。NHK の大河ドラマの第 1 作『花の生涯』も 1963 年よりスタートしている。特に人形芝居は通常の TV ドラマとは異なりスタジオ内におけるスペースも狭くて済む大きな利点がある。また、カメラも人形劇のフレームに合わせておけば固定できる大きな利点がある。また、TV 放送が開始されたころはいわゆるテレビタレントという概念自体がまだ確認されていない背景を考えれば、人形劇が重宝されたことは容易に想像がつく。1970 年代にはほぼすべての家庭にテレビが普及したとも言われ、この時にはすでにテレビ局の番組製作のノウハウも蓄積され、人形劇が TV 放送される機会は減少していくのである。

「NHK アーカイブズ」の「人形劇全リスト」で放送開始から『ひよっこりひょうたん島』までのものを取り上げておきたい。⁽¹⁵⁾

玉藻前

1953 年 2 月～10 月放送

テレビ放送開始 3 週間でスタートした初の連続人形劇。平安時代末期、白面金毛九尾の狐の化身である絶世の美女・玉藻前が鳥羽上皇に仕え、運命に翻弄されていく姿を、糸操りの人形劇で大人向けに描いた。

原作／岡本綺堂 人形／結城孫三郎一座。

チロリン村とくるみの木

1956 年 4 月～1964 年 4 月放送

子ども向けの連続人形劇として制作された作品。人形の体の部分に手を入れて操るギニョールが使用された。当初は週に 1 回の放送だったが、人気の上昇とともに帯番組に。また、生放送から収録番組になるなど、日進月歩の放送技術にあわせて撮影スタイルを確立し、後の NHK 連続人形劇の原型となった。

作／垣松恭助 人形／劇団やまいも。

宇宙船シリカ

1960 年 9 月～1962 年 3 月放送

原案・星新一、脚色・前田武彦、音楽・富田勲。

マリオネットを使った人形劇。ピロ少年とボブ艇長が操る宇宙船シリカの大冒険が描かれた。

銀河少年隊

1963 年 4 月～1965 年 4 月放送

手塚治虫の原作を元に制作されたマリオネットを使った人形劇。地球の危機を救う物質・ピリコンを探しに、少年ロップが宇宙

へ旅立つ。

ひょっこりひょうたん島

1964年4月～1969年4月放送

作／井上ひさし、山元譲久 人形／ひとみ座。

NHK 連続人形劇で初めて棒で操る人形が登場。物語の奇抜さから、放送開始直後は視聴率がふるわなかったが、やがて時代とマッチした新しい感覚に人気が発爆。国民的な人形劇となっていた。

その後も辻村ジュサブローの人形で一躍人気を博した連続人形劇『新八大伝』（1973～1975）も坂本九による七五調の語り、文楽風の精巧な人形は印象的であった。月曜日～金曜日の18：30-18：45の時間で、こどもだけでなくおとなにも大人気であった。辻村ジュサブローの人形劇は続き、『真田十勇士』（1975～1977）も放映された。平成に入ってから人気脚本家の三谷幸喜（b.1961）脚色の連続人形活劇『新・三銃士』（2009～2010）がNHKの連続人形劇として登場した。

エピソード

シェイクスピア劇が台詞劇である以上、台詞劇としての人形劇が成立していなければシェイクスピア作品を取り上げることはかなり難しいということになる。西洋の人形劇は台詞劇という性格を強く持ち合わせているため、形式としてはシェイクスピア作品を取り上げることができる。ひとみ座が他の人形劇団と異なり積極的にシェイクスピア作品を取り扱っていることは注目に値する。もちろん、江戸時代から一座を構える結城座も伝統の中に外国作品を取り入れ、

シェイクスピア作品を上演していることは忘れることはできない。西洋の人形劇が、児童文化等を強く掲げたため、人形劇＝子どものためのものという固定観念があり、シェイクスピアと結び付きにくいことや、長時間の上演に向かないという時間的制約もあるかもしれない。また、文楽の場合には曲に合わせた語りとは異なり、台詞劇の様相も強いため、シェイクスピア作品を扱いやすい面もある。杉野橘太郎「人形劇」(1983)では次のように述べている。

人形の小さい姿と自由で幻想的な特性は、今後テレビと映画での新生面を、期待しうるものである。⁽¹⁶⁾

劇場では人形の大きさは演技等に大きな影響をもたらす、テレビや映画は実物とは異なった大きさの感覚を与えるほか、クローズアップなどにより人形の大きさに関係なく画面構成することができる。さらに、1950年代、1960年代の人形劇のテレビ放映時代にこどもであった世代は今や50～60歳代となり、人形劇に抵抗感もなく、むしろ郷愁の念を抱くかもしれない。実写やアニメ、デジタル化された映像に馴れているこどもには、人形劇が新鮮に思えることだろう。超少子高齢時代⁽¹⁷⁾、インターネット時代を迎え、パフォーマンス自体もより多様化し、大きい劇場から会議室、喫茶店のようなところまで、会場も多様化している。人形自体への注目も現在では以前とは少し異なっている様相がある。ゆるキャラをはじめ、キグルのキャラクターがすっかり定着している時代だ。ミッキーマウスからくまモンまで、こどもだけでなくおともなにも大人気である。現代日本は人形だけらけといってもよいかもしれない。こうした時代であるからこそ、人形劇にも新たな光が当てられる可能性を秘めているのではないだろうか。

注

(1) シェイクスピア映画についてはこれまでも多くの研究書が出版されている。筆者自身も以下のようにシェイクスピア映画に関する研究を発表している。全般的なものを取り上げてきたものが、以下の通りある。

[1] 論文等のタイトルでシェイクスピア映画（シェイクスピア映像）を明示したもの（全般的なもの、単独さ映画を扱ったものは除外した）

「シェイクスピアと映像——日本の状況を考える」（『英米文学と言語』第2期第3号、ビビュロス研究会、1994年3月）

「日本における Shakespeare 映像」（『武蔵野短期大学研究紀要』第9輯、武蔵野短期大学、1995年6月）

[2] 論文等の中でシェイクスピア映画（シェイクスピア映像）を扱ったもの

『日本の沙翁劇と英国のシェイクスピア劇—受容を通してみる日本文化—』（武蔵野学院大学佐々木隆研究室、2016年7月）

『第5回国際シェイクスピア学会が残したもの』（武蔵野学院大学佐々木隆研究室、2016年9月）

[3] シェイクスピア映画（部分的なものを含める）に関する口頭発表等

「日本のシェイクスピア 150 年」（第1回駒澤大学シェイクスピア・フォーラム、駒澤大学、1990年4月）

「日本におけるシェイクスピア受容史」（第1回国士舘大学外国語外国文化研究大会、国士舘大学、1990年9月）

「シェイクスピアと映像——日本」（第58回ビビュロス研究会、

法政大学、1993 年 6 月)

「日本における英米文学 映像をめぐって」(第 3 回日欧比較文化研究会、武蔵野短期大学、1997 年 7 月)

「英米文学と映画」(第 6 回日欧比較文化研究会、武蔵野短期大学、2000 年 7 月)

「日本の沙翁劇・英国のシェイクスピア劇—受容を通して見る日本文化」(阿佐ヶ谷ワークショップ、2015 年 3 月)

「日本の沙翁劇・英国のシェイクスピア劇—第 5 回国際シェイクスピア学会が残したもの」(阿佐ヶ谷ワークショップ、2015 年 11 月)

(2) 佐々木隆「人形劇によるシェイクスピア劇上演記録」(『むらおさ』第 27 号、むらおさ同人会、2018 年 1 月)、その後「シェイクスピア文楽」(『むらおさ』第 28 号、むらおさ同人会、2018 年 7 月)も発表した。

(3) 川尻泰司・藤原玄洋「人形劇」

(<https://kotobank.jp/word/%E4%BA%BA%E5%BD%A2%E5%8A%87-110789#人形劇の歴史>) (2017 年 2 月 27 日アクセス)

(4) 「結城座」

(<http://www.youkiza.jp/about/rekishi.html>) (2017 年 2 月 2 日アクセス)

(5) 加藤暁子『日本の人形劇 1867-2007』法政大学出版局、2007 年 12 月)、p.15.

(6) Ibid., p.29.

(7) 「見世物興行年表(2013 年 11 月 3 日)」(http://blog.livedoor.jp/misemono/archives/cat_50049748.html) (2017 年 2 月 2 日アクセス)

(8) 加藤暁子『日本の人形劇 1867-2007』、pp.31-32.

- (9) 「木馬座」(<http://www.mokubaza.org/>) (2017 年 2 月 7 日アクセス)
- (10) 「藤城清治プロフィール」(<http://www.seiji-fujishiro.com/profile.html>) (2017 年 2 月 7 日アクセス)
- (11) 「人形劇団プーク」(<http://www.puk.jp/aboutPUK.htm>) (2017 年 2 月 8 日アクセス)
- (12) 「ひとみ座」(<http://hitomiza.com/gaiyou.html>) (2017 年 2 月 9 日アクセス)
- (13) 「探見劇場 大阪の劇団クラルテが初の舞台化」(<http://www.clarte-net.co.jp/clarte/04adult/hamlet2001/htmls/asahi.html>)(2018 年 4 月 30 日アクセス)
- (14) 佐々木隆「TV 放送のオタク文化への影響」(『日欧比較文化研究』第 19 号、日欧比較文化研究会、2015 年 10 月)、pp.32-33.
- (15) 「NHK アーカイブス 人形劇全リスト」(<http://www.nhk.or.jp/archives/search/special/detail/?d=puppet-anime000>)(2017 年 2 月 14 日アクセス)
- ※年代表記についてはすべて西暦で統一した。
- (16) 杉野橘太郎「人形劇」(早稲田大学坪内博士記念演劇博物館編『演劇百科大事典』第 4 巻、平凡社、1983 年 4 月)、p.353.
- (17) 佐々木隆「超少子高齢社会における日本の教育改革—総合的な学習の時間の果たす役割」(『高齢社会と地域』第 1 号、高齢社会研究会、2018 年 8 月)、p.1

【キーワード】シェイクスピア、人形劇、人形浄瑠璃、文楽、結城座